最後の歌

平成二年七月七日、かつての中隊の生き残り十七名が、二日市温泉の宿に集まった。
会えば黙って手を握り、肩を抱き合い、涙ぐむ者が多かった。
あの戦争の時代は遠くなっても、決して遠のくことのないさまざまな記憶が自分たちにはある。
同年兵のFが出席してないのが気になった。彼は私にこんなことを言ったことがある。
「木寺、お前はちょっと見たところ馬鹿には見えんが、あんまり頭は良くねえな。お前のごとオットリしていたら生きて故郷の山や海を見ることはできんぞ。
お前台湾から氷砂糖など内地へ送ったそうだが、そんなもんが無事に着くと思っとるんか。戦争で人の心は荒れている。みんな途中で横取りされるんじゃよ。
戦争は勝つか、負けるか、わからんがいつか終る。その時生きて帰るか、骨で帰るか、その差は大きいぞ」
十八年九月二日比島セブ島に上陸、ガダルカナル方面で壊滅した船舶部隊の再建をしていた船舶兵団の

指揮下に入った。
リロアンという寒村があるが、ここに暁部隊三千五百名ぐらいの新兵が訓練を受けていた。
治安が悪く外出はできなかった。夜中に兵が随分と殺された。
オーロラと名づけた原地の少年を私は可愛がった。
タオル、ハンカチ、赤チンなどをやると、旨いマンゴ、パパイヤなどを持って来た。
ある日、トラックに乗った兵たちがやって来て、マンゴを取りに行かないかと誘った。マンゴ街道と呼ばれる場所へ行くのである。私が行く準備をしていたらオーロラがやって来て、
「マンゴを持って来た」
と言い私の手を引っ張り、行かせなかった。
トラックは土ぼこりをたてて出発した。そして、そのトラックは、帰ってくることはなかった。そして又、それっきりその日を最後にオーロラ少年は姿を見せることはなかった。
戦況は昭和十九年九月二十一日を境に極度に悪化した。その日の朝八時、澄み渡った青空に、米軍機の大編隊が現れ、マニラ湾に浮かぶ日本船団は破壊された。翌二十二日も続いた。日本軍の戦闘能力は半減した。
このような状況の中で、平常心を保つのはむつかしい。
日本を離れて外地にゆくと、再び帰れるかどうかという気があるから、みんな何となくしんみりしていて、物静かな感じであった。戦況が悪くなると考えることが多くなる。

昭和十九年四月九日、高雄に上陸したら、初年兵が待っていた。
昭和二十年二月台北市に至り植物園の宿舎に入った。
この間が私の一番いい生活だった。船舶司令部に勤務したが、学生出身者が多くどことなくゆったりしていた。
戦後に訪ねて見たが、原地の人々は温かく迎えてくれた。
植物は手入れがよく、昔よりきれいになっていた。
食いしんぼうの私だが、台湾料理は油が多いのが苦手である。
台湾で一番旨いものは、花連港の「カツオの塩辛」である。長い間その味を求めてあちこち探したが無い。どなたか台湾に行く機会があれば、是非手に入れて下さい。
旨い理由はわからないが、岩塩にあるのではないかと思ったりしている。
宿の女将がやって来て、
「聞いて貰いたいことがありますので、しばらく時間を下さいませんか」。
そう言って六十歳代と思われる婦人を紹介した。

「私は終戦後、食糧事情などの関係で東京から、母の故郷である柳川市近郊に移り住んだ、坂田と申す者でございます。
父を早く亡くし、兄と私は母に育てられました。

女手一つで手間賃などに励む母の苦労は、子供の目にも痛々しいほどでした。母の寝ている姿は殆ど見たことはありません。苦しい生活の中から、兄を大学、私を女学校へ進学させてくれました。

ある日、兄がこんな話しをしました。

『今日は素晴らしいハーモニカの演奏を聴いた。曲は「海ゆかば」を編曲したものだったが感動で涙が出た。できたらもう一度聴きたいもんだ。音楽家志望の九州出身の人らしかった。こんな時世だからもう聴けないだろうな』

太平洋戦争の後半、日本軍が敗退し、玉砕を重ねたとき、それを報じるラジオから流しつづけられた「海ゆかば」勇壮にも響くが悲哀を感じさせる曲でした。

多くの人の記憶に焼きついているのは、昭和十八年東京の神宮外苑競技場で催された、出陣学徒壮行会の光景ではなかったでしょうか。

母と私は懸命に兄の姿を探しました。雨の中、泥だらけで行進する学生たち、母は見逃しませんでした。突然、前方を指差し、

『居たっー』

と叫びました。

もう再び生きて会うことはないと思ったのでしょう。

大きく腕を振り、足を上げ、その場で行進をはじめました。

雨に打たれながら、涙をボロボロ流しながら、顔をグシャグシャにして、学生たちの歩調に合わせまし

た。
私は母を見守りながら、その愛情の深さに泣きました。学生たちを見送る大観衆が「海ゆかば」を歌いはじめました。
地響きのような歌声でした。
あれから四十七年の歳月が流れました。先年母もこの世を去り、一人ぼっちになりました。
その私に体が震えるほどの嬉しいことがありました。兄が話していたハーモニカ奏者の方がわかったのでございます。
ここにお集まりの中の音楽家、伊藤先生でした。兄の写真と一緒にやって参りました。
先生、勝手なお願いでございますがどうか、どうか・・・」
後は言葉にならなかった。

話しを聞き終った全員十七名は、俯いたまま全く身動きしなかった。たまりかねた誰かが
「しっかりせい、伊藤」
と気合を入れた。
「そうだ、お前の分野だ。指図をせい、指図を」
ようやく立ち上がった彼は、
「場所はピアノのある大広間、会場づくり、マイクの取付け、楽譜のコピーを頼む」

と言って、駆け足でどこかへ行った。
三十分ぐらいして同じ宿にいたらしい、ソプラノ歌手のC女史と伴奏者を伴って帰って来た。三人で細かい打合せが進んでいる様子だった。
「みんなよく聞いてくれ。先に俺のハーモニカの演奏、つづいてC女史の独唱、最後は全員で「海ゆかば」を合唱する。いまからやることは、単なる音楽会ではない。心を込めて歌ってもらう。いいか」
「返事が小さい、返事が」
「ハーイッ」
と叫ぶような返事をしたのは、いつの間に集まったのか、泊り客と従業員の百名近い人々でした。
彼は写真に向かって深く深く頭を下げた。振り向いた彼の顔に涙らしいものが見えた。
会場は緊張感が漲った。
少年時代ハーモニカ小僧と呼ばれ、多くの人に愛された彼、三本のハーモニカを使っての独奏は、会場の人々の胸を打った。
ソプラノ歌手のC女史の声量は会場を圧倒した。拳を握り少し涙を見せながらの「海ゆかば」の熱唱だった。伊藤は大きくうなずき満足気だった。彼のタクトの合図で、全員の合唱になった。終ると伊藤は写真に頭を下げた。そして依頼者の婦人の側に行きその肩を抱いた。婦人は手を合わせた。
今後、口ずさむこともないであろう最後の歌「海ゆかば」であった。